

第9分科会

学生が過ごしたコロナ禍の大学生活

報告者

山田 剛史 関西大学 教育推進部 教授
佐藤 万知 京都大学 教育学研究科 准教授
江崎 洋子 京都文教大学・短期大学 社会連携部
フィールドリサーチオフィス 職員
学生 3名 京都文教大学 地域連携学生プロジェクト
商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas

コーディネーター

中西 勝彦 京都文教大学 総合社会学部 助教

学生が過ごしたコロナ禍の大学生活

コーディネーター

京都文教大学 総合社会学部 助教 中西 勝彦

○本分科会のねらい

2020年4月から新型コロナウイルス感染症予防対策として、各大学はキャンパスの閉鎖やオンライン授業の実施、課外活動の制限など、様々な対応を行ってきた。そのようなコロナ禍の大学において、大学生はどのような状況だったのだろうか？

本分科会では、入学当初からコロナ禍だった2020年度入学生に焦点をあて、彼らがどのような大学生活を経験してきたのかを様々な角度から想像、考察することを目的とした。「大学」や「教職員」を主語にするのではなく、「学生」を主語にした視点から、今まさにかけがえのない大学生活を過ごす学生に寄り添った議論を行うことを目指した。

なお、本分科会では学生を2つの側面を有する者、すなわち「大学での正課プログラムを通じて学ぶ、学習者としての学生」と「発達段階における青年期を過ごす、若者としての学生」としてとらえ、特に後者の側面を重視して議論を展開した。

○報告の概要

本分科会では、①全国の大学生を対象とした量的調査の結果（山田氏）、②2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果（佐藤氏）、③コロナ禍の学生生活の実践報告（江崎氏と学生3名）という、異なる3つの視点からご発表頂き、コロナ禍の学生の様子を多角的に検討した。以下に各発表の概要を記す。

講演1 山田 剛史 氏（関西大学 教育推進部 教授）

「コロナ禍に実施された大規模学生調査の結果」

コロナ禍に実施された大規模学生調査（ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習・生活実態調査」）の結果を中心に、〈学習〉〈実感〉〈発達〉の3つの視点からコロナ禍の学生の特徴が説明された。

〈学習〉については、コロナ禍であってもアクティブラーニング型授業は進んでおり、学生の学習への行動的エンゲージメントは高まった一方で、授業外学習時間は増えておらず、学びに対する受動性は高まっていた。これらの結果について、山田氏は「大学が学生の〈主体性〉を引き出すことに成功していないことを示すものである。その背景には教員と学生の双方の要因が関連しているが、何より学生が『学ぶことが好き・楽しい』と感じられていないことが最大の問題ではないか」と指摘した。

〈実感〉については、2020年度入学生の「学びの充実感」と「成長実感」は他の学年と比べて低いことが示された。2022年になって、2020年度入学生の実感も増えてはいるものの、彼らが1年目に経験できなかったことを取り戻すことはできない。今まさに就職活動を迎えている彼らの様子を大学教育関係者はしっかりと見ないといけない、との指摘があった。

〈発達〉については、青年期の重要な発達課題であるアイデンティティやレジリエンスに関する指標が「オンラインの割合が高い」「2020年度入学生」で有意に低かったことが示された。2020年度入学生は入学当初に入学式などの行事、友人をつくる機会、キャンパスに通うという身体的経験がなかったことが、彼らの発達に影響を与えている可能性が示された。最後に「深い学生理解は大学改革の一丁目一番地である」という言葉で締めくくられた。

講演2 佐藤 万知 氏（京都大学 教育学研究科 准教授）

「2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果」

2020年度入学生がどのようなプロセスで大学生になっていくのか、という問題意識のもと行われたインタビュー調査の分析結果が示された。抽出された5つの概念について、以下の通り説明がされた。

入学時点における大学や大学生のイメージがコロナ禍での学生生活の原動力になり、かつ、評価軸になっていたこと（原動力としてのイメージ）。2020年度入学生は、入学式やサークル等の新歓イベント、講義室

や食堂の利用などの身体的な経験が欠如しているため、大学生という実感を得られていない（身体的経験の欠如）。そのため、自己認識としては高校の延長線上にいる感覚であり、学習についてもそれまでの学習方略を誰にも崩されることなくそのまま用いていたこと（高校4年生的经验）。大学生生活の経験を語る際、授業での経験が多く語られたことから、彼らの大学生生活を構成するリアリティとして授業の割合が高かったこと（大学生生活としての授業経験）。オンライン授業やキャンパス閉鎖に由来する困難さの語りはあるが、他者との関係における葛藤などの語りは欠如していた。オンライン中心の環境で関わる相手を自らコントロールしていたようだ（コントロールされた人間関係）。

最後に、これらのことが、彼らの今後の大学生生活やその後の生活にどのような影響を及ぼすのかを継続的に検証する必要があるとまとめられた。

発表後の質疑応答では、先輩とのつながりによる影響は語られたか、ジェンダーによる大学イメージの差は見られたか、の質問があった。前者に対しては、学生によっては先輩との交流を経験していたが、通常の学生生活で経験される「先輩との交流って良いね」というものとは質的に異なる可能性があるとの回答があった。後者に対してはジェンダーを要素として分析していないため不明であるが、今回の語りで明確なジェンダー差を示すようなものはなかった、との回答があった。

講演3 江崎 洋子 氏（京都文教大学・短期大学 社会連携部 フィールドリサーチオフィス 職員）

「コロナ禍での学生の課外活動」

最初に江崎氏から京都文教大学の地域連携学生プロジェクト「商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas」に関する説明があった。その後、同団体に所属する学生3名に、コロナ禍で様々な活動が制限される中での取り組みの様子やその際の心境などについて、江崎氏との対話形式で語って頂いた。

2019年度入学生である三品さんからは、先輩としてオンラインでの新入生勧誘で苦労したことや工夫したこと、周りのメンバーのモチベーションが低下するなか「活動を止めない」ことを意識して活動を行ったこと、それでも企画の準備をする度に「本当にできるのか?」「コロナのせいでできなくなるのでは」と考えてしまっていたこと、卒業式で卒業する先輩にお礼を言えなかったことが悔しかったこと、などの経験が語られた。

2020年度入学生である山中さんと倉橋さんからは、ご自身の経験として以下の事柄が語られた。入学当初は寂しい日々を送っていたこと、CanVasには入学前から入ろうと思っておりメールなどの情報を欠かさずチェックしていたこと、加入後オンラインでしか先輩と関わらなかったことでモチベーションが低下したこと、初めて対面で先輩と会った時に先輩は実在しているという実感が持てたこと、新たに企画した写真展の準備作業時に初めて夜の商店街を見て感動したこと、今年度コロナ以前と同様のイベント運営を初めて経験でき嬉しかったこと、学生で打上げをする時には職員の顔が浮かんでしまい「クラスターを出したらどうしよう」と思ったこと、コロナ以前は商店街の人や教職員と一緒に打上げをしていたことを先輩から聞いていたがそこまではまだ戻っていないこと、などが語られた。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

発表後のパネルディスカッションでは、Google Formsに寄せられた質問に登壇者が回答しながら議論を進めた。概略は以下の通り。

(1) オンライン授業が多くてもアイデンティティ指標への影響が小さかった人の傾向はあるか？

〔山田氏〕自分の居場所を持っている人、リアルでもバーチャルでも人とのつながりを切っていない人は影響を受けていない。オンライン授業の比率は偏差値が高い大学が多いため、高偏差値帯の学生のアイデンティティに影響が出ているとも言える。

(2) 2020年度入学生に対して卒業までの間に大学や教職員はどのような手助けや働きかけができるか？

〔山田氏〕学生の関心事は就職活動に向いている。彼らがこれまでの大学生生活で経験した1つ1つの経験を意味づけるための伴走やメンタリングができれば良いのではないかと。学生が3年間の意味を見出す手助けをする、ということ。

〔佐藤氏〕それに加えて、揺さぶりをかけることも大切になるかもしれない。それは卒業論文／研究とい

う経験になるだろう。卒論の執筆を丁寧に行うことを通じて揺さぶりをかけ、葛藤経験を提供する、というオーソドックスなことでも良いのではないか。

(3) 学生調査に関する2つの発表を聞いて、学生の皆さんは実感を持つか？

〔学生〕実感するところはあった。例えば、量的調査の中にあった「単位を楽に取れる授業が良い」を私も選ぶと思う。受け身になっている部分があるなと実感する。インタビュー調査の「身体的経験の欠如」は入学当初の自分自身のことだと実感する。

〔山田氏〕こんなにしっかりしている（登壇）学生でも、「楽単（楽に単位が取れる）志向」となると、じゃあ授業に興味がある人はどこにいるのか？と思ってしまう。ただ、コロナ禍になって通常の生活を送るだけでも大変なので、戦略的に楽単志向にならざるを得なかった面もあるかもしれない。いずれにしても、大学の授業がもっと魅力的にならないといけないだろう。

(4) 大学が「ガクチカ（就職活動で聞かれる質問「学生時代に力を入れたことは何ですか？」の略称）」を提供する場になっていることについてどう考えるか？

〔山田氏〕正直、就職活動の早期化は勘弁して欲しいが、それを批判してもどうしようもない。学生が「ガクチカ」を得るために頑張る、あるいは就職活動に早めに備えるというのは、それだけ学生が将来に対して不安を抱いているのだろう。私たちはその事実を受けとめたうえで、学生が安心して学業に取り組める環境をどのようにつくれるかを考えないといけない。

〔中西〕そもそも「ガクチカ」とは、立派な活動をしたことを自慢するものではない。活動のプロセスを丁寧に説明するものである。そのことが誤解されているように思う。「ガクチカ」は結果であって、目的ではない。しかし、コロナ禍において「ガクチカ」の目的化がより強くなったかもしれない。

(5) CanVASに入ろうと思ったのは、「ガクチカ」のためだったか？（中西→学生）

〔三品さん〕すでに就職活動は終えたが、就活の中でCanVASの経験をガクチカとして使った。ただ、ガクチカのために加入したわけではない。高校生ではできないことをしたい、他の大学生がしないことをしたいと思ってこの活動に参加した。就活をしていて、ガクチカは「この活動で何を学んだのか」「どのように活動してきたのか」が重要だと実感した。ガクチカを集めるためだけの人とは一味違う、そういう活動をしてきたと自負している。

〔山中さん〕就活ではCanVASの活動をガクチカとして話そうとは思っているが、そのために入ろうと思ったわけではない。イベントの企画や地域と関わりたいと思ってこの団体に入ったし、代表としてこの活動に命を捧げるくらい頑張った。

〔倉橋さん〕地方出身でキラキラした大学生生活に憧れていた。CanVASの活動紹介を見て、大人数で先輩後輩と一緒に活動する様子に魅力を感じて飛び込んだ。ガクチカなんて考えてなかった。

〔学生〕周りから「あなたはガクチカがあって良いね」と言われることはあった。でも、コロナになって環境も変わり、立場が違えば状況も違うので、そういう人のことをとやかく言うことはできないと思っている。

(6) 2020年度入学生の成長実感が低いのは理解できるが、それは遠隔「授業」が決定要因なのか？そもそも学生の授業への期待値は低いため、「対面」授業が学生の学びの態度にマッチしているだけとも受け取れるのではないか？

〔山田氏〕成長実感に関しては、授業が対面から遠隔になったことが直接影響しているわけではないかもしれない。間接的か他の要因（キャンパスに通えない、活動が行えない）の一つとして遠隔授業を捉えることができるかもしれない。

(7) 2020年度入学生に対する指摘には同感した。2019年度入学生にも似たような傾向を感じるが、どう思われるか？

〔佐藤氏〕実際に検証していないのでわからないが、おそらく何かしらの影響はあるだろう。長期間コロナ禍の大学生活を送ったことの影響が。ただ、今回の調査は2020年度入学生しか対象としていないので、

2019 年度生はどうかはわからない。似たような傾向があることを否定はできないし、質問者が似たような傾向を感じているのなら、そういうこともあるのかもしれない。

〔江崎氏〕 学生と接していて、学年による違いは感じない。CanVas の活動に参加する学生は比較的意欲が高い学生であることも関係していると思う。ただ、加入した人数の違いはある（例年 20 名以上が加入するが、2020 年度生の加入は 6 名）ので、それはコロナの影響だと感じるが、参加しているメンバー間での違いは感じない。

(8) 今回のような 2020 年度入学生の人生に影響するような問題を指摘する教員があまりにも少ないように感じている。もっと社会的に話題になっても良いと思うがどうか？

〔山田氏〕 これまでこの問題を発信してきた。今後も発信を続けるつもりだが、でも教員にはなかなか刺さらない。おそらく教員は授業でどれだけ知識を学生に渡せるかが重要だと考えているのではないかな。学生の発達とか成長といったことは、教員の日常の外側にあることなのかなと思わざるを得ない。そういう点では、職員の方がこういう問題意識を持っているかもしれない。今回のことをきっかけに学生が社会人になっていく最後の砦として、大学という機関がブリッジングを意識しないといけない。1 年後、3 年後、5 年後、彼らが幸せに過ごしているかを見ていかないといけない。

〔佐藤氏〕 コロナの制限がなくなって「もとに戻ったね」という表現があるが、それはおかしいのではないかな。コロナ禍での大学生活の経験は消えるものではない。彼らがこの経験をどのように解釈していくかはこれからだろう。いずれにしても、この経験がなかったことになるわけではない。コロナ禍の大学生活が彼らにとっての大学生活であったという事実は変わらない。それは学生に限らず、新任の教職員にも言えるし、もっと広げると誰だってコロナ禍の影響を受けていると言える。私たちは、この経験が今後どう解釈されていくのか、どう語られていくのかに注目する必要がある。

(9) 学生が打上げをやったときに「職員の顔が浮かんた」という話があったが、それは職員の管理者としての色合いが強くなったのではないかなと思うが、そういう実感はあったか？（中西→江崎氏）

〔江崎氏〕 管理していたと思う。昨年度、商店街で学生が活動するときにユニフォーム（法被）を「着ないで」と言ったことがある。活動の時はいつも着ていて、商店街の人の認知度も高いユニフォームだったにもかかわらず、商店街に学生がいると、商店街の人に迷惑と思われてしまうのかなという懸念から「着ないで」と言った。このことを事前打合せのときに思い出してハッとした。衝撃的だった。コロナ前は伴走者の色合いが強かった職員が、コロナ禍になってからは管理者の役割を背負うことになった、という変化は確実にあったと思う。

※会場参加者対象のワークショップの内容は、スライド資料をご参照ください。

以上

スライド1

大学コンソーシアム京都
2022年度 第28回FDフォーラム

第9分科会
「学生が過ごしたコロナ禍の大学生活」
趣旨説明

コーディネーター：中西 勝彦（京都文教大学）
2023年2月24日（金） ハイブリッド開催

スライド2

本分科会の趣旨

もっと知りたい！コロナ禍の大学生

コロナ禍において大学生はどのような状況だったのだろうか？
本分科会では、主に2020年度入学生に焦点をあて、彼らがどのような大学生活を経験してきたのかを様々な角度から想像します。
「大学は」「教職員は」ではなく、「学生は」の視点から今まさにかけがえのない大学生活を過ごす学生に寄り添った議論を進めます。

スライド3

本分科会での学生のとらえ方

学生が有する2つの側面

1. 大学での正課プログラムを通して学ぶ、
学習者としての学生

2. 発達段階における青年期を過ごす、
若者としての学生

スライド4

なぜ2020年度入学生か

■ 入学直後からコロナ禍の大学生活を送っている
■ 様々な調査から、他の学年とは異なる様子が窺える
■ 今まさに私たちの目の前にいる学生である

「全日本学生生活協同組合連合会（2023）第58回学生生活実態調査（速報）」より作成

結果に対するコメント（調査報告より）

- ほぼコロナ禍前の19年の水準に回復した。
- 現3年も、年々充実度が増し、他学年よりは低いものの差は小さくなっている。
- 勉学、友人関係、サークルについても同様の傾向。
- 学生たちは、現実を受け入れ、コロナに何とか対応したと言えそう。
- 自由記述欄の声も、あきらめなどの悲観的な声はあるものの、昨年より大幅に減った。

スライド5

本日のご発表

	ご所属	お名前	テーマ
1	関西大学	山田 剛史 氏	コロナ禍がもたらした学生生活の変化と成長・発達への影響 ～大規模学生調査の結果を踏まえて～
2	京都大学	佐藤 万知 氏	2020年度入学生を対象としたインタビュー調査の結果
3	京都文教大学	江崎 洋子 氏 学生（三品さん、 山中さん、倉橋さん）	コロナ禍における学生の課外活動についての実践報告

パネルディスカッション

- ・質疑応答
- ・コロナ禍において大学生はどのような状況だったのだろうか

質問はGoogleフォームからお寄せください。何度でも投稿できます。

スライド6

会場参加者向け
ワークショップの説明

スライド7

ワークショップの準備	
A4白紙を4つに折り、カラーペンで各枠内に右の点について書いてください。3つ目、4つ目は文章ではなく、キャッチコピー的に書いてください。	所属
	お名前
	発表＋パネルディスカッションで考えたこと、気になったこと
いま考える「フツの大学生活」とは	

スライド8

ワークショップの目的と流れ
■ 本日の発表およびパネルディスカッションの気づきや学びについて、意見交換を通じて持ち帰れる形にする ■ 「学生のことを知る」ために、これからの私たちにできることを、ワークショップを通じて考える。
1. 趣旨説明 2. アイスブレイク「発表の感想を話し合おう」 3. グループワーク「学生のことを知るための方法を考えよう」 4. 登壇者からのコメント、まとめ

スライド9

ワークショップの心がまえ
■ 肩肘張らずリラックス＆楽しみながらご参加ください。 ■ 立場は脇に置き、フラットな関係を意識しましょう。 ■ 限られた時間ですので、みんなで意見交換しましょう。 ■ 発表者はあちこち見て回ります。ご自由にお声掛けください

スライド10

アイスブレイク
まずは、ワークメンバーを確定し、それから「アイスブレイク」をしていきましょう！
アイスブレイク とは …氷のような「かたい雰囲気」を和らげ、参加者の緊張をほぐすためのゲームやワークなど

スライド11

アイスブレイク
メンバーと思いを分かち合おう
● 所属と名前 ● 発表とパネルディスカッションの感想 ● わたしの考える「フツの大学生活」

スライド12

ワーク①
個人ワーク「ブレスト」
緑色：学生のことをもっと知るためにできること ピンク：知った情報を構成員とどのように共有できるかを個人で考え、付箋紙に書いてください。
1トピック1枚で書いてください！

ワーク①

グループワーク「共有しよう」

各意見の詳細を説明しながら、模造紙に貼り出していきます。
似たような意見は近くに配置し、カテゴリごとにまとめます。

まとめることがゴールではなく、
知恵を共有することがゴールです

スライド1

大学コンソーシアム京畿主催、2022年度第28回円形フォーラム
(2023.02.24、14:00-17:30@ハイフレックス)

第9分科会「学生が過ごしたコロナ禍の大学生活」

コロナ禍に実施された大規模学生調査の結果

山田 剛史
Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.
関西大学教育推進部 教授
t-yamada@kansai-u.ac.jp

スライド2

TIMETABLE

- ① 調査の概要～時代的な背景
- ② コロナ禍とそれ以前で教育・学習はどう変わったのか
- ③ 学生はコロナ禍で学びと成長を実感出来ているのか
- ④ コロナ禍は学生の発達にどのような影響をもたらしたか

スライド3

Tsuyoshi Yamada's Profile

EDUCATION

- ・ 島根大学 教育研究センター／講師・准教授、副センター長 (2006.8-2011.3)
- ・ 愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室／准教授、副室長 (2011.4-2015.3)
- ・ 京都大学 高等教育研究開発推進センター・教育学研究科／准教授 (2015.4-2020.9)
- ・ 関西大学 教育推進部／教授 (2020.10-)

RESEARCH

- ・ 教育開発 (高等教育開発) × 成長支援 (青年心理学)、神戸大学博士 (学術)
- ・ 子どもが学校から社会へと円滑に移行し、健康で幸福に生きるための学校(教育・支援)はいかにあるべきか、どのように組織的に設計し、持続的に実践・運用するか

SERVICE

- ・ 初年次教育学会理事、大学教育学会代議員、高等教育員保証学会評議員、日本アカデミック・アクトバランシング協会副会長、日本青年心理学会常任理事など
- ・ 文部科学省「大学教育再生加速プログラム」委員／ペーパーレフェリー、文部科学省「先進的の大学改革推進委託事業」選定委員、文部科学省「知識基的型社会を支える人材育成事業」プログラムオフィサー、大学基準協会大学評価分科会委員、立命館大学S5P外部アドバイザー、名古屋大学教員准教授など
- ・ 東山中学・高等学校教員顧問

スライド4

**ベネッセ教育総合研究所
「大学生の学習・生活実態調査」**

調査対象
●全国の大学1～4年生

調査方法
●インターネット調査

各回の調査時期・サンプル数

●第1回	2008年10月	4,070名 (男子2,439名、女子1,631名)
●第2回	2012年11月	4,911名 (男子2,791名、女子2,120名)
●第3回	2016年11～12月	4,948名 (男子2,680名、女子2,268名)
●第4回	2021年12月	4,124名 (男子2,228名、女子1,896名)

※インターネット調査会社の約20万人のモニター毎集団のうち、「大学生」として登録されている約15万人に対して予備調査を実施。このうち、大学1～4年生 (18～24歳、日本在住) にアンケートの協力をお願い。
※各回、文部科学省の「学校基本調査」の男女比率に近いサンプル構成になるように回収している

調査内容
●高校での学習状況／大学選択理由／大学の志望度／入学時の期待／大学生生活で力を入れたこと／大学生生活の過ごし方／教職員との交流／保護者との関係／友だち関係／大学教育観／学びの機会／授業方法 (対面授業・オンライン授業) に対する評価／学びに対する姿勢・態度／大学生生活で身につけたこと／海外留学の意向／進路意識／進学の精神やポリシーの認知／大学生生活の満足度／学びの充実／成長実感／社会観・就労観／就職活動・インターンシップ など
※調査内容は、経年比較が可能になるように毎回ほぼ同一の内容にしているが、各回ごとの問題関心により異なる内容を含めている

調査メンバー
●川嶋太洋夫 (大阪大学)、杉谷祐美子 (青山学院大学)、山田剛史 (関西大学)、谷田川ルミ (芝浦工業大学)、樋口健 (新潟大学)、吉本真代 (大阪大学)、小林一木・木村治生・朝永昌季 (ベネッセ教育総合研究所)

スライド5

第4回調査の対象者の属性

※以下の数値は、構成比率 (%) を示している

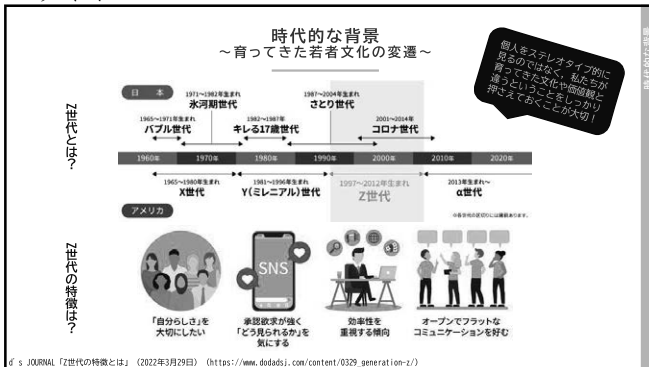
性別	男子	女子							
	54.0	46.0							
学年	1年生	2年生	3年生	4年生					
	25.0	25.0	25.0	25.0					
所属大学	4年制	6年制	通信制	非夜間制	専門・専門大	海外の大学			
	93.5	4.6	1.3	0.4	0.9	0.1			
学部系統	人文系	社会科学系	外国語学系	法学系	経済学系	国際学系	教育学系	生活科学系	芸術学系
	13.0	6.5	3.6	7.6	16.5	2.4	5.5	2.6	2.7
	総合科学系	保健衛生系	医学系	歯学系	薬学系	理学系	工学系	農水産学系	その他
	1.2	6.8	2.3	0.5	2.6	5.4	14.7	3.4	2.5
設置主体	国立	公立	私立						
	23.2	8.2	68.6						
大学所在地	北海道・東北	関東	中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄			
	8.0	42.0	15.1	20.3	7.5	7.2			
住まい	自宅	一人暮らし	大学寮	大学以外の家	その他				
	63.4	31.7	2.9	0.5	1.5				

スライド6

**時代的な背景
～学生が受けてきた教育・学習環境の変遷～**
(ベネッセ本社作成)

対象者の 生年	対象者が受けた 初等中等教育	対象者が受けた 高等教育	調査結果
第1回 2008年	1984～1990年 1989年告示 新しい学力観と個性尊重	2004年 国立大学法人化、評価評価制度	いまだきの大学生 先輩に立たず、 努力にはあきらめ
第2回 2012年	1988～1994年 1999年告示 生きる力とゆとり確保	2012年 大学教育の質的転換 →アクティブ・ラーニング	従来の対応に満足しても、 自主的な取組をするのは少数
第3回 2016年	1992～1998年 2002年学びのすそめ 2004年PS5シヨック	2016年 高大接続システム改革会議 →入試制度改革	アクティブ・ラーニングが浸透、 学生の学びは異様に、 一方で、大学に「面壁をみてほし い」学生は増加
第4回 2021年	1997～2003年 2008・2009年告示 確かな学力の確保	2020年 デジタル化推進計画 →学修成果、教育成果の可視化 2017年告示 主体的・対話的で深い学び 大学入学共通テスト開始	時代の進化 (デジタル化等) 学生の姿 ? コロナ禍 教育改革 (初等中等/高等)

スライド7



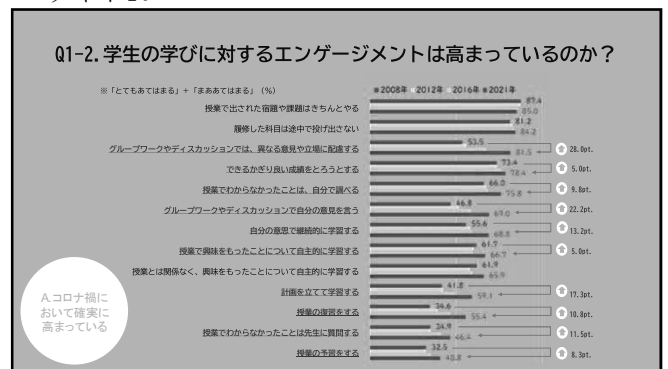
スライド8



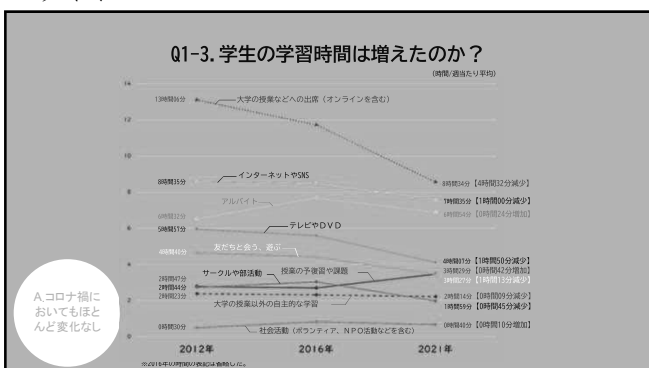
スライド9



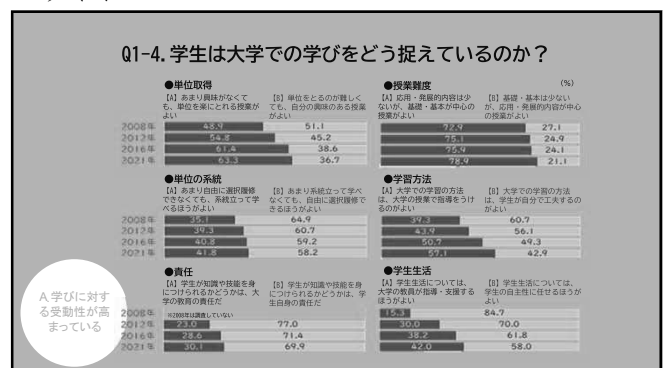
スライド10



スライド11



スライド12



スライド13

みなさんへの問いかけ①

この4つの調査結果(以下2点)を見て、どのように感じるでしょうか？

「AL型授業は増加し、学習への行動的エンゲージメントは高まっている」

「授業外学習時間は増えておらず、学びに対する受動性が高まっている」

CAP制

成績評価の厳格化

アクティブラーニング

FD

遠隔授業

学生の「主体性」をいかに引き出し、育むか？

スライド14

学びに「受け身」増える

総学習時間は減 対面授業の転換必要

内閣府が調査 中高生の学習状況

コロナ禍で大卒生の変化

日本経済新聞 教育面 (2022年6月23日)

スライド15

WHY?

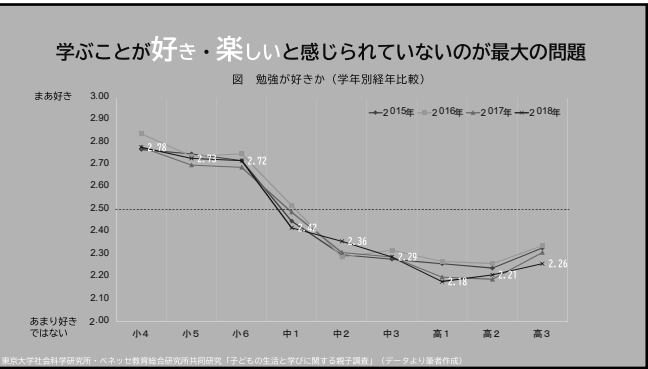
教員側の要因

目的や問いが明確になっていない
教員からのフィードバックが不十分等
AL実施が目的化、実はそんなに進んでいない

学生側の要因

高校までに主体的に学ぶ姿勢が身につけていない
学生の「生徒化」
単位取得が目的化、就職準備>>>学び

スライド16

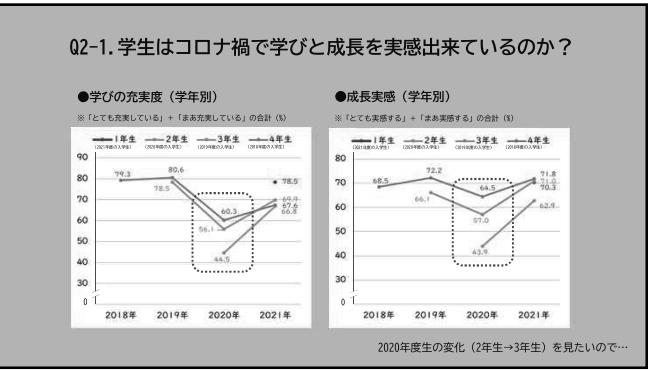


スライド17

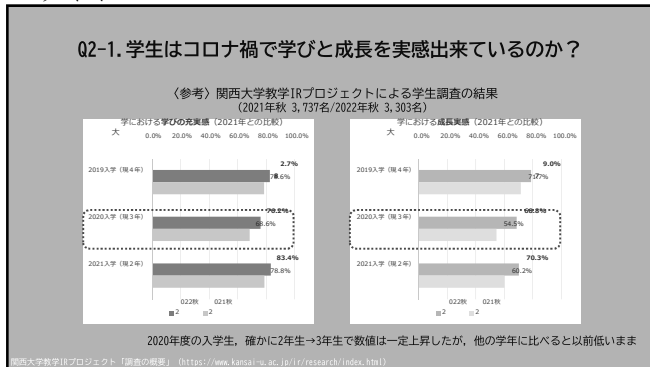
STUDENT GROWTH FACTS

コロナ禍は学生の成長・発達にどのような影響をもたらしたのか。ここでは、対面と遠隔授業の割合という観点、コロナ禍の影響を最も受けた2020年度入学生(調査実施時点では2年生)とそれ以外の差異という観点に着目して調査結果を見ていく。

スライド18



スライド19



スライド20

みなさんへの問いかけ②

➢依然、2020年度入学学生の「実感」は相対的に低い

➢全国大学生協連の「第58回(2022年秋実施)学生生活実態調査 速報」では、「学生生活充実度は、コロナ禍前の19年の水準にほぼ回復」「学生はコロナ禍にかなり適応しつつあるようだ。コロナ禍の長期化、様々な制限の緩和で、現実を受け入れつつあるのだろう」とある。

➢このデータ、解釈の違いをどう考えますか？

https://www.univcoop.or.jp/press/11fa/rep0158_01.html (2023年1月31日)

スライド21



スライド22

Q2-1. 学生はコロナ禍で学びと成長を実感出来ているのか？

✓ 学生生活の充実感は、これまで出来なかったことが出来るようになり、現時点での充実感としては肯定的かもしれないが、学びの充実度や成長実感は、それまでの学生生活での経験がベースになって得られる感覚であるため、ギャップがあると考えられる。しかし、より重要なのは後者の感覚である。

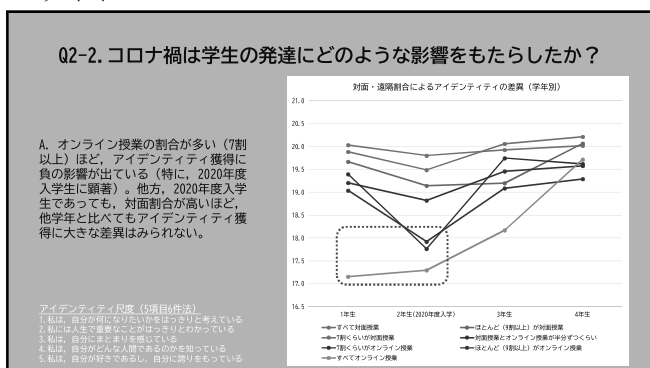
✓ 特に、2020年度入学学生はその感覚が相対的に低く、それが現在～4年生にかけた就職活動(キャリア選択)及びそれ以降において影響が出てくる可能性が高いため、憂鬱感は出来ないと思える。

フレーズ 1年目にできなかったことは取り戻せない

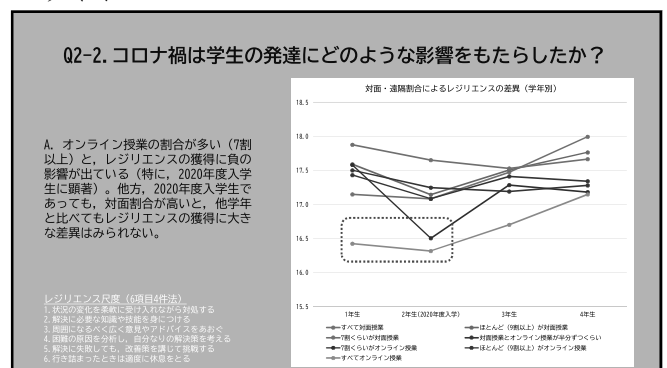
関西大学が昨年9～10月に在学生対象に実施した調査で、学生生活の満足度や学びの充実感が低下していることが、入学から1年が経った今、改めて明らかになった。入学から1年が経った今、改めて明らかになった。入学から1年が経った今、改めて明らかになった。

関西大教職IRプロジェクト「調査の結果」
URL: <https://www.kansai-u.ac.jp/ir/research/index.html>

スライド23



スライド24



みなさんへの問いかけ③

- ▶ 青年期の重要な発達課題であるアイデンティティやレジリエンスの獲得が「オンライン割合が高い」「2020年度入学生」で有意に低かった。
- ▶ なぜ、この2点が重なることで学生の発達に重大なリスクを生じさせたのでしょうか？

Q2-2. コロナ禍は学生の発達にどのような影響をもたらしたか？

● **学生の学びと成長を止めない
ニューノーマル時代の学生支援**

「学生支援」の観点から、コロナ禍の学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

学生支援の専門家として、学生支援の現状と課題について、学生支援の専門家から意見を伺います。

日本の場合、学生の大半は1歳〜2歳の年齢層であり、年長保育施設や児童館に当たる。学校が休校と同時期に、また、子どもと大人としか行ける重要な時期である。この時期は、習性も育ちも決まると言われる。養育環境（専業主婦/夫）でも、様々な物事と経験（おもちゃなど）で、双方向の関わりである。その時期に、養育者の関わりが子どもの発達に大きく影響する。この「自分のアイデンティティや個性を確立する」ということにもつながる。養育者の関わりが子どもの発達に大きく影響する。この「自分のアイデンティティや個性を確立する」ということにもつながる。養育者の関わりが子どもの発達に大きく影響する。この「自分のアイデンティティや個性を確立する」ということにもつながる。

この年の心身の社会的発達を遂げる。()

養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。

養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。

養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。

養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。養育により、子どもは自己と、情動表現(教材提供)も、知識表現(一方向性)に集中する。

山田由美 (2021)「学生の学びと成長を止めないニューノーマル時代の学生支援」『Jリクルート カレッジマネジメント』2021年、6号

THANK YOU FOR LISTENING

～深い学生理解は大学改革の一丁目一番地!～

スライド1

2020年度入学生を対象とした
インタビュー調査の結果

第28回FDフォーラム
京都大学教育学研究科准教授 佐藤万知

スライド2

本研究の背景

- 2020年4月より、新型コロナウイルス感染症予防を目的に、多くの大学がキャンパスの閉鎖やオンライン授業への移行に踏み切った。
- オンライン授業の満足度は比較的高い。
e.g. 文部科学省（2021）の調査では、約6割の学生がオンライン授業の満足度にポジティブな回答（「満足（13.8%）」「ある程度満足（43.1%）」）
- 一方で、当時2年生は、他学年と比べて、オンライン授業満足度や理解度が低い傾向（e.g.九州大学，2020；関西大学，2021）。
- 学生生活の充実度（2020年度）に関しては、特に当時2年生の充実度が著しく低下【1年生の充実度：2019：89.4%→2020：56.5%】（全国大学生生活協同組合連合会，2021）。
- 2021年度と同調査においては、当時1年生（80.6%）より当時2年生（70.8%）の方が充実度が低い（全国大学生生活協同組合連合会，2022）。

2020年度入学者は他の学年とは違う状態にあることが推察される

スライド3

本研究の目的

- 大学生は多様な生き残り戦略を用いて大学内外の生活を送っている主体的な存在であり、経験を通じて大学生として社会化している（武内，2008）
- 大学生は青年期の発達段階にあり、他者や大学との関係がアイデンティティ形成における重要な要素となっている（吉川・栗村，2014）

当時学部2年生が他の学年と異なる回答傾向にあるのは、コロナ禍での大学生活経験において、通常の学部1年生が経験するようなことを経験できていないからではないか。

本研究の目的

- 2020年度入学者がコロナ禍の大学生活でどのような経験をしてきたのか
- その経験が大学観や大学生観にどのような影響を与えているのか（大学観：自分にとっての大学という場の意味づけ、大学生観：自らの大学生としての価値観の2点について明らかにする。

スライド4

本研究の概要

認識論的立場

- 「経験」は客観的に存在するのではなく、語られることで構築されるという立場。すなわち、本研究で明らかにすることを目指す「経験」は、現時点で振り返った時に意味づけされる「経験」

インタビュー調査の実施

対象：2020年度入学生、12名（異なる3つの大学）

方法：zoomを使用したオンラインインタビュー（半構造化面接法）

時期：2021年5月～10月

主な質問項目：

- 受験時から入学に至るまでの流れ
- 1年次の前期・後期授業の様子
- 入学前に抱いていた大学や大学生活に対するイメージや期待
- 大学生としての実感

分析の手順

- 承諾を得てレコーディングした音声データを逐語録に変換
- 逐語録を複数名の分析者が精読し、各調査協力者の大学生活経験の要約を作成
- 分析者同士での議論を通して、2020年度入学者特有の大学生活経験に関する概念を抽出

スライド5

インタビュー協力者一覧

NO	事例	性別	実施	大学	居住形態	学部の規模	担当
1	A	M	8月	X大学	実家	小（約60名）	I
2	B	F	8月	X大学	下宿	小（約60名）	II
3	C	F	9月	X大学	実家	小（約60名）	III
4	D	M	10月	X大学	下宿	小（約60名）	I
5	E	F	10月	X大学	実家	小（約60名）	II
6	F	M	10月	X大学	下宿	小（約60名）	I
7	G	F	10月	X大学	下宿	小（約60名）	I
8	H	M	8月	Y大学	下宿	中（約150名）	I
9	I	F	8月	Y大学	下宿	中（約150名）	I
10	J	F	5月	Z大学	下宿	大（約200名）	I
11	K	F	5月	Z大学	下宿	大（約200名）	I
12	L	F	5月	Z大学	実家	大（約200名）	I

スライド6

インタビュー結果

原動力としてのイメージ

- 入学前に抱いていた大学・大学生のイメージや期待
e.g. 「人生の夏休み」「キラキラ」「ドラマのような」「先輩らといっぱい遊ぶ」「とにかく楽しむ」「授業外での自由」「同じような価値観を持った人と友達になりたい」「教員と仲良くなりたい」「面白い人と出会いたい」
- これらのイメージを原動力として行動する（e.g. 議論するために人と人が出会う場をつくる、ツイッターのハッシュタグで××大学というのを探しコミュニティに入る、アルバイトを始める、etc.）
- 一方で、大学のイメージとの比較で現状を評価（e.g. 先生とご飯食べたりすると思っていたのにできていない、遊び方が大学生っぽくない、授業の後に一緒にご飯を食べることができていない、etc.）

→大学生活のイメージが原動力となり制限下での行動がおこされる一方で、現状を分析するための評価軸にもなっている

スライド7

インタビュー調査の結果

≫ 身体的経験の欠如

- 入学式、新歓イベント、大学の講義室、図書館、食堂、部室など、セレモニーや実際のスペースを経験していないため、大学生になった実感をもられていない

「自分って今大学生なのかみたいな言っていて、（家族に）その割にはずっとおうちにいるよねとかって言われて、そうだよって言って。（略）なんか大学生って感じじゃなかったですね。」（Jさん）

「せっかく入学したのに、入学式してないのは、入ってないやん、みたいな。別にまあ開催できむんのはしょうがないけど、入学式なかったら入った気にならないから、やって欲しかったな」（Lさん）

「今（2年生夏）は全然大学生だと思っています。（自分は大学生なのかと）自問自答することもなく。2年の前期になって、大学に行けることが増えたからだと思います。私自身が結構環境とか目に入ってくる物理的なイメージに多少左右される感じで、高校とは違ういろんな建物があって、いろんな人が行き交っていて。授業を受ける所が広かったり、食堂があったりって、そういう大学っぽい環境とか設備を目にする機会が増えたから、あ、自分はちゃんと大学生になっているんだってあるという風にあることが増えた」（Iさん）

「本当に大学生してるなって感じて。学食とかも初めて行っし（略）お昼休みとかになつたすごい大学生がいっぱいいて（略）こんだけ人いたんだと思うし、すごいキラキラしているなー。これが大学かと思いました」（Jさん）

→ 対面授業の再開、キャンパス閉鎖の解除をきっかけに身体的経験を経て、大学生という実感を持つ

スライド8

インタビュー調査結果

≫ 高校4年生の経験

- 授業での学習活動においても、日常の過ごし方についても比較対象が不在で揺さぶりの経験がないため、それまでのやり方を継続。キャンパスでの活動や対面授業に参加し、他の学生の様子をみて、初めて多様な大学生にふれる

「その殻を破られることがないというか、自分がずっと、高校の時まで持ってたものがそのまま、誰からも影響されることがなく、ただただ底を深堀りしていくしかなかったというか、そういう感じですね」（Cさん）

「浪人のときって（略）一人で勉強するというか、（略）ほんまに勉強メインで自分一人でずっとやっている感じがあったんですけど、去年一年、（略）浪人の延長ってというのが一番合ってると思います。」（Aさん）

「大学の課題がそもそもどんぐりの量なのかの目安がわからなかった。多いも少ないも、これが基準なのかな？みたいな感じで。」（Iさん）

「高校からの連続だったので、別にそんなに違和感とか、しんどさとかなく慣れたんですけど、本来がどうなのかわかんないからどうなんだろうなって思いながら受けていました（略）授業を休むって感覚がわからなくなっちゃって」（Gさん）

→ 高校までのやり方を揺さぶる経験がなく、結果的に、高校の延長のような行動をしているという認識。

スライド9

インタビュー調査結果

≫ 大学生活としての授業経験

- 授業経験がオンライン、対面いずれの形態であっても自分にとっての大学を構成するリアリティとして語られた

「初めはすごい新鮮だったので、普通に大学の授業自体が。あと興味があるものを取ったので、話を聞くのもすごく面白かったですね。面白くて楽しくて授業を聞いていましたね。（F）」

「パソコンで授業、オンデマンド型で授業っていうのは、ある意味新しいなあっていうか、大学生かとも思ったんですけど、出された課題を書いて提出して、そしたら気がついたら1日終わって、みたいな。なんか高校生の時の夏休みがずっと続いてるなみたいな感じがして、大学生だよな？私、みたいな。（I）」

「オンラインでなんかすごく遠いところに先生がいて、Zoomのあと、質問ある人は残ってねっていつくたさっても、質問あるときは残ったりしたんですけど、あの話が気になったのでちょっと続き聞きたいですとか、そういう気楽な感じで話しかけにはいけなから（略）大学の先生っていうのが、やっぱりそれはもちろん中高の先生とちょっと違う、もうなんかもっと偉いというか、凄く距離感が、自分の中でわからないまま、なんかちょっと神秘的な先生の先生をまだ見てるんですけどいいのかしらみたいな。（G）」

→ 授業に関連する活動が生活の大半を占めていることから自らの大学生としての意識や大学に対する理解を説明するものとして語られている。

スライド10

インタビュー調査結果

≫ 「コントロールされた人間関係」

- オンラインコミュニティやツールの選択や関わり方において各自が取捨選択している状態。それが良くも悪くも人間関係構築をコントロールしている

「やっぱりSNSってとっただけ盛り上がってても、その人と実際話が合うかっていったらそんなことなく、結構ノリで言ってるところがあるんですね。（略）別にSNSで友達作っても、どうせ話合はんのわかってるんで。」と語る一方で「めっちゃ好きな〇〇という芸人さんが（テレビ番組）に出るってなって（略）専用のツイッターアカウント作って、新しい交流の場が広がって」（Lさん）

「本来だったら（人間関係を構築する）レベルの高い人たちと一緒にいなきゃいけなかったところを、コロナっていうインディキャップで、みんな一緒になったみたいな。だから、そういうところで、ゆっくり人間関係を作っていたから、ちょっと普通の大学生活が始まる時よりは上手くできたのかなっていう。」（Hさん）

→ 多様な他者との交流や偶発の出会い、周りの人に流される、ノイズに晒される経験と、それによって引き起こされる葛藤についての語りは少なかった

→ オンラインにおけるコントロールされた人間関係では、コミュニティの選択や関わり方を決めることが可能となるが、人間関係での葛藤は起こりにくかったと考えられる

スライド11

≫ まとめ

- これまでの学生調査でも明らかにされてきたように、学習の機会という意味でのオンライン授業は、概ね評価されている。しかし、経験という意味では、大学の授業を受けているという実感や授業前後の交流が欠如しているため、限定的である
- 2020年度入学の学生は、入学式やサークル等の新歓イベント、講義室や食堂の利用など身体的な経験が欠如しているため、大学生という実感を得られていない。そのため、自己認識としては高校の延長線上にいる感覚であった
- 大学や大学生のイメージがコロナ禍での大学生活における原動力になり、かつ、評価軸になっていた
- オンライン授業やキャンパス閉鎖に由来する困難さの語りはあるが、他者との関係における葛藤や学習に関する困難さなどの語りは欠如していた。成長のための葛藤を経験していない可能性がある

身体的経験の欠如により大学生としての実感や葛藤の経験を限定的にしている。このことは、今後の大学生活に対して、どのような影響を及ぼすのか、継続的に検証する必要があるだろう。

スライド12

≫ 参考文献

- 関西大学 教学IR プロジェクト（2021）2020 年度秋学期実施「対面授業にする学生アンケート」（https://www.kansai-u.ac.jp/ir/tainen_survey_2020au_digest.pdf），[2022/03/15]
- 九州大学（2020）九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート（春学期）結果について（https://www.kyushu-u.ac.jp/fi/40309/20_08_11_01.pdf），[2022/03/15]
- 文部科学省（2021）新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等の大学生活に関する調査等の結果について（https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kouhou01-00004520_1.pdf），[2022/03/15]
- 武内清（2008）学生文化の実態と大学教育、高等教育研究，11：7-23
- 吉川満典・栗村昭子（2014）心理的居場所の研究：大学生のアイデンティティの確立と情動知能の見地から、総合福祉科学研究，5：41-50
- 全国大学生生活協同組合連合会（2021）第56回学生生活実態調査の概要報告（<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>），[2022/03/15]
- 全国大学生生活協同組合連合会（2022）第57回学生生活実態調査 概要報告（https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57.pdf），[2022/03/15]

本研究は中西勝彦（京都文教大学）、勝間理沙（京都大学）、大野真理子（京都大学）、藤田風花（京都大学）との共同研究です。
インタビューにご協力くださった学生のみみなさんに謝意を表します。

スライド1



スライド2



スライド3

地域連携学生プロジェクト

地域を対象とする学生の自主的な活動のなかから、地域特性を活かしつつ、成果が期待できる取組をプロジェクトを募集、選定し、支援、助成する。

【募集条件】

- ① 大学の学びの延長にあり、それを発展的に展開するような取組
- ② 地域住民・行政・地元企業・団体等との連携、協働で展開する取組
- ③ 現場主義教育の趣旨に合う取組
- ④ 本学教員のアドバイスのもとに展開する取組

【地域連携学生プロジェクト1年の流れ】

4月	4月～5月	5月下旬	6月上旬	2月下旬～3月上旬
募集開始	申請書類の提出	採択選考会 実施	採択決定！活動開始	報告書の提出 成果報告会 実施

QRコード: 地域連携学生プロジェクトHP

スライド4

2022年度採択プロジェクト

プロジェクト名	活動期間	取組内容	活動地域	連携先
宇治☆茶レンジャー	2010年～ (継続13年)	宇治茶を学び、その魅力を発信する	宇治市	京都府茶業会議所 茶業関係施設、店舗
商店街活性化隊 しあわせ工房CanVas	2014年～ (継続8年)	宇治橋通り商店街と連携し、まちの活性化に取り組む	宇治市	宇治橋通り商店街 宇治市 (広報課、観光課)
KASANE0 (カサネオ)	2018年～ (継続4年)	ファッションをテーマにした多世代交流の促進	宇治市	宇治市 (長寿生きがい課)
REACH	2019年～ (継続3年)	多様な人との交流を通じた偏見のない社会づくり	伏見区 京田辺市	福祉施設 (三休) 依存症回復施設 (京都ダルク)
KminK (クミンク)	2022年～ (新規)	久御山町の課題解決を通して地域振興に取り組む	久御山町	久御山町 (企画財政課)

スライド5

商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas

宇治橋通り商店街を
「また来たい」と思える
“笑店街”へ

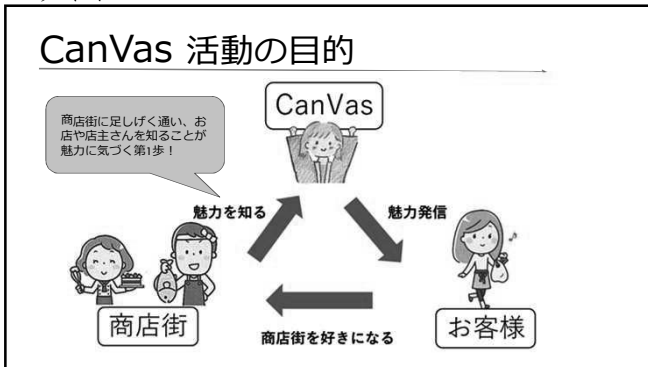
スライド6

商店街活性化隊しあわせ工房 CanVas

【プロジェクト概要】

- ・活動期間：2014年～（継続9年）
- ・活動エリア：京都府宇治市
- ・連携団体：宇治橋通商店街振興組合、宇治市など
- ・アドバイザー：片山明久（京都文教大学総合社会学部准教授）
- ・メンバー：40名
- ・活動内容：宇治橋通商店街振興組合の公認を受け、商店街と共に、地域の賑わい創出を目指し活動を行う。夏と秋に開催される商店街イベントには、企画段階から参画し、また商店街の細かな魅力を発見できるまちあるきイベント「宇治ロケイニング」や、市民参加型写真展「宇治ふおと！」を主催するなど、宇治橋通り商店街と共に、「笑店街」づくりに取り組むプロジェクト。

スライド7



スライド8

CanVAS グループ構成

夏祭り班	わんさか班	ロゲイニング班
●8月に宇治橋通り商店街で開催される夏祭り「スマイルサタデー」に参加。子どもを対象としたワークショップブースの企画・運営を行う。 ●宇治商工会議所NEWSやサテライトキャンパス情報紙へ、地元企業や商店街の店舗紹介の記事作成。 ●他地域のイベントへの参加。 ●本学「ともいきフェスティバル」の企画提案・実施。 ●「オンライン企業見学会」企画・運営（2020、2021年）	●10月に宇治橋通り商店街で開催される「わんさかフェスタ」で、会場全体で楽しめるイベントの企画・運営を行う。またフェスタの実行委員会にも加わり、全体の運営にも携わる。 ●市民参加型写真展「宇治ふもと！」企画・運営（2021年～） ●コロナ禍で中止となった「わんさかフェスタ」の代替イベントとして考案。宇治市の魅力発信事業に位置付け、市と協働で企画を進めている。	●フォトロゲイニングの手法を用いて、中宇治エリアのまちあるきを行う「宇治ロゲイニング」の企画・運営を行う。 ●近隣小学生や本学の新生入生、地域の高齢者など、ターゲットを絞って年に2度ほど開催 ●観光客やお買い物客を対象にした簡易版の実施 ●2024年度大河ドラマ「光る君へ」に合わせ、「源氏物語」をテーマにしたロゲイニングを考案中。

スライド9



スライド10



スライド11



スライド12

コロナ前・コロナ禍・その後の変化

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
全体	通常通り実施	4～8月対面での活動自粛	ほぼ対面での活動実施	対面での活動実施
商店街での活動	通常通り実施	4～8月活動自粛 9月～少人数で申請書を提出して実施	少人数で、申請書を提出して実施感染状況によっては自粛	申請書を提出して実施
新生入生への勧誘	歓迎お花見会開催	オンラインで開催 大半はオンラインで実施 後半もオンライン推奨	InstagramなどSNSを活用	大学にて対面実施
学生ミーティング	大学にて対面実施	基本的には対面実施 感染状況により変更	オンラインで実施	大学にて対面実施
商店街とのミーティング	対面実施	オンラインで実施	オンラインで実施	オンラインで実施
スマイルサタデー	開催	中止	中止	開催
わんさかフェスタ	開催	中止 代替イベントとして「宇治ふもと！」を考案	中止 「宇治ふもと！」企画・実施	開催 「宇治ふもと！」も引き続き実施
宇治ロゲイニング	一般対象のもの2回 簡易版1回	本学新生対象1回 簡易版1回	本学新生対象→中止 簡易版1回	一般対象1回 新規内容の企画の検討
全国まちづくりカレッジ	旭川大学にて開催	西南学院大学よりオンラインで開催	香川大学よりオンラインで開催	香川大学にて開催
新たな取り組み		宇治商工会議所NEWS記事作成 オンライン企業見学会	宇治ふもと！	

スライド13

学生話を聞いてみよう

三品 日向（みしな ひゅうが）さん

2019年度入学／総合社会学部4年次生／2021年度副代表／夏祭り班所属

山中 怜奈（やまなか れな）さん

2020年度入学／総合社会学部3年次生／2022年度代表／わんさか班所属

倉橋 寧音（くらはし ねね）さん

2020年度入学／総合社会学部3年次生／わんさか班所属／一人暮らし

スライド14

学生話を聞いてみよう

2020年4月～

- ・キャンパスは閉鎖、大学に行けない
- ・新生に活動をPRする場もない
- ・地域のイベントや行事は中止
- ・昨年みたいな、プロジェクト活動はできない

憧れの大学生活！サークルやプロジェクトに入りたくて、積極的に情報を探した

オンラインで説明会を実施。でも、一方的に話をするだけになってしまう...

先輩たちからイベントを引き継ぎ、自分たちの手でやり遂げたい...と思っていた

スライド15

学生話を聞いてみよう

2020年夏～冬

- ・オンラインでのプロジェクト活動
- ・モチベーションの低下をどう防ぐか？
- ・初めての対面でのミーティング！
- ・学外での活動は、少ない人数で、短時間で
- ・少しでもプロジェクトらしいことをしたい（させてあげたい）

話を聞いているだけのミーティング。やめようと思ったことも...

オンラインでもみんなが喋れるように工夫

コロナ禍でもできる学生たちの活躍の場を探した

月に1回でいいから、対面でミーティングをさせてほしい！

スライド16

学生話を聞いてみよう

2021年4月～

- ・対面での授業も増え、キャンパスも賑わいを取り戻しつつある
- ・ミーティングも対面で行えるようになった
- ・一方で、オンラインミーティングにも慣れてきた
- ・今年も地域のイベントや行事は中止が多い

学生ミーティングは対面で、商店街に出向いて行っていた商店街とのミーティングはオンライン。便利だけど...

代替イベントの考案。2020年度から検討していた新企画「宇治ふおと！」を実施！

スライド17

学生話を聞いてみよう

2022年4月～

- ・ほとんどの授業が対面に
- ・ある程度の制限は残るが、地域での活動も自由にできるようになってきた
- ・地域のイベントや行事も復活！
- ・一見、コロナ前に戻ったような...

夏と秋に行われる宇治橋通りのイベントが復活！

コロナ前を知っている学生がいる間に再開できてよかった

地域の人、以前を知っているが、学生はコロナ前を知らない。大規模なイベントに馴れていない。

元に戻った訳ではない。今でもできないことはたくさんある...

スライド18

お知らせ CanVasイベント紹介 宇治ふおと！～子どもと笑顔の写真展

2月4日（土）～25日（土）
宇治橋通り商店街協力店舗（全13店舗）
詳細は、下記のQRコードからご覧いただけます。



スライド19

お知らせ

宇治飯 うまいもんチャンネル

宇治商工会議所では、宇治市内の飲食店の応援とまちの活性化を図るため、店主イチオシの料理を調理の様子から完成まで撮影し、YouTube「宇治飯うまいもんチャンネル」で発信しています。今回、登壇した三品くんが、この動画製作に携わっています。

宇治飯 うまいもんチャンネル ➡



スライド20

ご清聴ありがとうございました。

この後の、パネルディスカッションや
ワークショップもよろしくお願いします。